



## 令和7年度 乳幼児教育・保育協働研修通信

テーマ  
「インクルーシブ教育の  
理念の実現」

令和7年11月28日(金)  
第18回研修会(発達・子育ち支援分野)を開催しました。  
【令和7年度 多様な学びの場創造事業研究報告会と合同実施】

30名の先生方と一緒に学び合いました。  
(保育所(園)2名・幼稚園2名・認定こども園7名・小学校17名・療育施設2名)

※ この研修通信は、研修会にご参加いただいた皆様はもとより、園内の体制等でご参加いただけなかった皆様にも研修会での学びの一端が伝わることを願って、研修会終了後の参加者による『振り返りシート』をもとにまとめたものです。(小学校は学校教育課に提出の感想より)

### 多様な学びの場創造事業について

宇治市教育委員会では、槇島中学校・槇島小学校・北槇島小学校の3校をモデル校とし、令和5年度より、児童生徒の実態把握を多角的な視点から行い、よりよい支援方法や支援の場の検討を行うとともに、インクルーシブ教育の理念の実現は、通常の学級も含めた学校全体で行うものだという教員の意識改革を研修等を通して行い、授業のユニバーサルデザインなどの授業改善に取り組んできました。

第18回宇治市乳幼児教育・保育協働研修会は、宇治市教育委員会と連携し、就学前からの切れ目のない支援をめざして、この「多様な学びの場創造事業」の集大成といえる各校(協働研修参加者は、槇島小か北槇島小のどちらか希望する学校に参加)の実践を公開授業や研究報告・協議等として、合同で実施いたしました。

## Ⅰ.公開授業

宇治市立槇島小学校・宇治市立北槇島小学校  
※ 就学前施設の先生方は全員、1年生のクラスを  
参観していただきました。



今日の授業から学んだインクルーシブな視点に基づいた  
環境整備や教師の援助等で心に残ったこと  
(参加できなかった仲間に知らせたいこと)



### 槇島小学校

- 子どもが興味をもてるアイテム
- 分かりやすいキャラクター(動物)
- 集中は続かなくとも注視しやすい教材

- 参加が難しい子どもが、どうしたら興味をもってくれるか、教師に何ができるかをとことん考える。

- 取りこぼしをなくす。

- 選べる環境の工夫

お面など  
視覚的に  
意識の向き  
やすい教材

職員の  
話し合い

確認を  
多くする

・タブレット or 紙  
・挑戦するレベル

☆ 子どもたちの育ってほしい力を  
伸ばす授業の実現

☆ 楽しんで授業に参加できていた。  
☆ 他の子どもの意欲にも繋がり、  
一体感があった。

☆ 45分間の授業でクラス 32 名の  
全ての子ども達の笑顔が見られ  
た。(一度も笑顔を見せない子が  
一人もいなかった)

### 北槇島小学校

- 「誰一人取り残さない」  
教育を目指す。

- 多種多様な授業の工夫

友達や先生  
に聞くことへ  
のハードルが  
低くなる環境  
づくり

一人でできる  
仕切られた空  
間が作られて  
いる。

タブレットを  
使用した授業

☆ 誰一人残さない教育の実現

☆ 支援を必要とする子どもが活躍  
できる場面が多くあり、イキイキと  
活動していた。

☆ 支援を必要とする子どもが通常  
級の子どもからやり方を教えてもら  
う姿が見られた。

☆ 得意な子、苦手な子が助け合う姿  
が良かった。

☆ タブレットでの授業は、理解度の  
差が気になった。その後のサポー  
トはどうされていくのか。



## 2.全体会 (I)研究協議

グループ協議中に仲間の発言で、心に残ったこと(参加できなかった仲間に知らせたいこと)



一人  
ひとり

- 一人ひとりを大切にする工夫
- 子ども達が楽しんで取り組んでいる姿
- 担任の先生が子どもと目線を合わせられるよう、屈んで関わっておられたこと
- いろんな子がいる中、45分の授業のどこかで参加できればいいという考え方、みんながちがっていいという考え方
- 強みを大切にする。
- その児童が安心できる場であることが大切

人的な  
充足

- インクルーシブな教育を持続させるためにはやはり人的な充足が必要では?
- ※支援の先生が必ずついていくことができないのは持続を防げる  
→ないものねだりをしても仕方ないけれど、現実としてはそこが外せない。

学校  
全体

- クラスの子だけではなく、みんなのことを大人が知ることでインクルーシブな教育が持続可能なものになっていく。
- インクルーシブ教育の理念を学校全体で共通認識しておくことが大切

社会の  
ルール  
や節度

- 社会のルールや節度をしっかり伝えていくことが大事。



工夫

- 質問キーワードはYESorNOで答えられないものを伝えていること
- やり取りができるような席の工夫
- 担任の先生(1年1組)の熱意や工夫の一つひとつが心に響いた。

保護者

- 子どもの自己肯定感…子どもが出した答えで不正解はないが、保護者が子どもの自己肯定感をつぶしてしまうことがある。
- 子どもだけでなく、保護者の強みも褒めるようにしている。



## (2)指導講評

京都府立宇治支援学校  
校長 星川 涼華 氏



指導講評で、心に残ったこと(参加できなかった仲間に知らせたいこと)

『当たり前に見えることが一番難しい』

『子どもに考える場、意思表示できる場を作っていくこと』

『自分の気持ちを言語化することが苦手な子が多いので、スマートトーク、少しづつ発言する場を設ける』

『それぞれの子どもを大切にするための環境の工夫』

『「思いの深い教師の取組に失敗はない」 京都市のある小学校の校長先生の言葉だが、これと重なる思いで見ていた』

『先生の何気ない一言がその子の今後のためになることもある』

『担任の先生が子どもに掛けていた言葉の紹介、「書けないはいいけど、書かないはやめよう」』



今日の学びを踏まえて、園で実践したいこと

一人ひとりを  
大切に (今まで同様)

一人ひとりが  
選べるという  
環境を少しでも  
多くしてあげたい。

引き続きになる  
が、一人ひとりの  
子どもを理解して  
いくこと、そしてそ  
の子にあった保育  
を実践すること

ほっとできる場  
所を作ること 子  
どもに安心でき  
る園にしていけ  
たらいいと思う。

誰一人取り残さない  
保育を目指して、一人  
ひとりについてを今まで  
以上に探し、誰もが  
意欲的に取り組める  
環境づくりを目指して  
いきたい。

年中・年長に向けて…  
相手の目を見て、最後  
まで聞く。  
(簡単なやり取り、言  
葉あそびを1対1で  
やってみるところから  
スタートしたい)

集団に入り  
にくい子ど  
もへの工夫

視覚的や意味  
としてもわかり  
やすく興味を  
引くものを取り  
入れる。

得意なことを生  
かし、自己肯定  
感を高める活動  
を工夫して取り  
入れていきたい。

今まで意識して  
いましたが、イン  
クルーシブな保  
育を目指したい。

子どもの興味・意  
欲を尊重し、肯定  
的な理解を深める  
ことで子どもの自  
己肯定感を育ん  
でいく。

## 一緒に参加された小学校の先生方の感想を紹介します。

### 公開授業についての感想

- ワークシートの名前を書かせる前にモニターで視覚提示をしたり、めあてにマス目を入れて書きやすくしたりするなどの工夫があり、子どもたちにとって分かりやすい授業だった。お面を使用して動物になりきらせて話すなど、支援の必要な児童も意欲的に参加できていた。
- 通常学級でパーテーションを用いる等、新鮮だった。自分で選択できる環境づくりがされていることが分かった。
- 「支援級の児童が活躍できる授業であったこと」「特別教室であったこともあり、教室のレイアウトが工夫しやすくしてあったこと」「先生の細かな声かけにより、児童が安心して取り組める授業であったこと」など、とても勉強になる授業だった。
- 支援が必要な児童が学習に興味を持って参加できるように、様々な工夫と愛情ある声かけや子どもに向ける優しい笑顔。支援が必要な児童だけでなく、学級全体をよく見て必要な時に必要な声かけをされていて、素晴らしいと思った。

### 協議の内容についての感想

- 子どもたちが、授業中笑顔でいられることや失敗をしても受け入れてもらえる学級の雰囲気作りは改めて大切だと感じた。
- 幼稚園や療育、管理職、通常級担任、通級担当など様々な立場からの意見が聞けてとても参考になった。
- 支援級の児童が活躍できていた一方で、何もできないまま過ごしていた児童や、タブレットがうまく操作出来ない児童などに先生の目が届ききれていなかったことなど、低学年のタブレット使用を前提にした授業には、支援の手が多数必要であり、担任一人では難しい。また、パーテーションで区切った個室のような場所や好きなグループで考えをシェアしあう場所の確保も通常の教室では、無理なのではないかという点を話し合った。

### 参考になった点

- 協議において小学校の教員だけでなく、療育機関やこども園の先生と交流したこと、様々な視点からインクルーシブ教育について考えることができ、多職種連携の大切さに気付いた。
- やはり大切なことは、教師一人ひとりの自覚と責任感による「構え」だと。どの子も巻き込んで育てていこうとすれば、自ずと授業中の工夫をするだろうし、その工夫を一人で考えても手詰まりになるから、お互いの工夫をリンクさせたり学び合ったりすればいい、ということを再確認できた。しかし、日々、他の様々な対応で追われる中、そのような機会が確保しにくいくらいこそ、「研究」というような枠を仕組み、学校全体で取り組むというか、意識づけしていくことも必要だと再認識できた。
- インクルーシブとは特別なことではない。子どもが生き生きと輝く場所と時間なのだと思った。
- タブレットを使用する際には、タブレットが苦手な児童のために、紙媒体も用意するなど教材の選択を増やす。
- 机と椅子の自由な配置や、床に座った状態での授業など好きな場所や好きな体勢で学習するという、西洋の教育方針を取り入れておられるところが参考になった。